望洋荘便り

第８９号
平成２３年
４月発行

東日本大地震後に続く余震と望洋荘の対応

社会福祉法人りんさく福祉会
理事長　須田　滉

平成二十三年三月十一日午後二時四十六分、空前絶後の大地震に見舞われ、いわき市は震災、津波、火災、福島第一原発放射能の拡散、それに伴う風評の問題にて、五重苦の被災を蒙ったと言えるでしょう。

望洋荘も当日から、津波に襲われた地元地区の方々が避難のため来所し、その方々のお世話に職員一同が力を合わせてしっかり対応した。それと並行して荘内の入所者の本来の世話があり、本当に大わらわであったことでしょう。停電、水道断水、ガス供給断、食糧不足、等々が一週間続きまさに陸の孤島化であった。ＦＭ放送や、ＮＨＫＴＶのテロップにも救援支援の依頼を流すほど、施設内の混乱は想像に絶するものがあったことでしょう。しかしながら職員一同一致団結して、震災後に望洋荘に残った入所者のお世話、更に須田医院に避難及び入院対応になった方も三月末から徐々に帰荘し、四月中旬までには全ての方の帰荘が適えましたが、その方々を含め、懸命な対応を図ってきました。が、この混乱の期間に一名の方が高齢に伴う老衰にて職員に見守られて永眠（三月二十二日）、また、もう一名の方は、家族の希望にて自宅避難となるも遠方の避難先にて急性脳内出血にて他界（三月二十四日）され誠に残念なことをしたなと今もって悔やんでいるところです。更に、重症な呼吸器疾患を有して須田医院に避難入院された方も慢性閉塞性肺疾患を伴う老衰にて亡くなられ、望洋荘の職員も所内で看取りが出来なかったこと残念がられていました。この震災に伴う入所者のトラブルとしての問題は殆んどなく、これも数少ない職員の努力の賜物と感謝しています。しかし、その陰に、自衛隊、市行政、地区の方々、家族会、ボランティアの活動による給水、支援物資、介護等の諸支援があったればこそ無事乗り越えられたものと重ねて感謝する次第です。その当時の職員の気構えと行動は、特集として先月号から掲載されている「東日本大震災、その時私は・・・」をお読みいただければ納得出来るかと思います。

四月四日までにショートステイの方が家族の方に無事引き取られ、四月八日で全て避難されていた方も望様荘に戻られ元の生活形態に復帰しました。余震も大小あるも職員臆することなく、荘内外の整備に奔走し、最終的には四月二十三日からショートステイも復活し本来の姿に戻りました。

四月十一日の夕方、続いて一二日の午後の連日にわたる余震と思われる震度六弱の強震に見舞われました。一時的な停電が生ずるも慌てることなく冷静に対応、しかも、これによる断水が見られも早急の対策で事なきを得ました。この予想だにもしなかった未曾有の災害に、多くの体験をしました。このことから、私たちは何を得、今後何をすべきかは、今後の私たちの行動が物語るのではないでしょうか。さらなる職員の皆さんのレベルアップに期待します。最後に、この大震災にて、職員、入荘者様は、さほど問題なく済んでも、その家族や身内におかれては災害による恐怖の体験、多くの直接の被害（大切な人や家財の喪失や、職場やコミュニティの喪失）を受けた方々も沢山いらっしゃることと思います。心のケアも含めての気遣いも忘れずにお願いいたします。

東日本大震災「その時私は……」②

介護士　佐藤　誠

地震発生時、自分は夜勤明けで自宅で休んでいました。突然の大きな揺れで慌てて起き、裸足で外へ出ました。揺れが収まるのを待ち家の中に戻りました。幸い家具の倒壊は無かったものの、酷い散らかりようでした。直ぐさま、家族、友人、施設、同僚に電話しましたが、回線は繋がるわけもなくただ一人で焦っていました。そうこうしている内に辺りは薄暗くなり、家族が揃ったのは大部時間が経っていました。夕方のニュースで観た大津波はとても黒く凄まじい力で、家屋や車、船などを呑み込み海へ戻っていました。

不気味な余震に耐えながら一夜を過ごし、翌日早く施設に向かいました。道中、所々の道路のヒビや家屋の崩壊。自衛隊の車を見た時、改めて事の重大さを感じました。自宅付近は大きな被害もなくライフラインも大丈夫だったので、施設に近づくにつれ、目の当たりにする光景に緊張感が高ぶりました。

自分のユニットに着き、入居者さんの顔を見たらホッとしました。誰一人怪我をする事も無くいたこと、声を掛けたらいつもの挨拶を返してくれたこと、こんな状況なのに笑顔が見られたこと。その後の日々は言葉に表せない程大変でした。ただそんな中で、居合わせた職員同士、協力し、工夫し、この大震災を乗り切れたことを誇りに思います。あの震災後の混乱を乗り切れたのだから、多少のことでは負けないと思います。

ただ、しばらくは地震は勘弁です。

介護士　伊藤　孝仁

三月十一日の大震災が来た日、私は休日の為外出していた。震災が来た時揺れの大きさに驚いた私は慌てて安全な場所に身を移し、落ち着くまでじっとしていた。なかなか揺れが収まらず、家族や職場にも連絡が取りない状況の中不安で一杯だった。多分に多くの人が自分と同じく不安に思っていたことだろう。

家に帰ると中はめちゃくちゃで壊れている箇所もあり呆然としてしまった。家は津波の心配はなかったが、職場のことを絶えず気にしながら片付けをしていた。電気は止まらなかったものの、水道が止まり、ガソリンが底をつきかけていた為、必要な物を買いに行くことも取りに行くことも出来ず、手も足も出ない状態だった。

今回の震災から、普段からの備えを怠ることなく生活していこうと思った。

介護士　猪狩　翔太

三月十一日、大震災が起きた。望洋荘に就職して十一目の出来事だった。新入職員として研修期間の身である私は、各ユニットを廻り、業務内容の学習や利用者様とのコミュニケーションをとっている最中であった。昼食を済ませ、午後の研修に入って間もなく凄まじい揺れが襲ってきた。今までに感じたことのない揺れに、隣にいた利用者様が倒れないように支えるだけで精一杯だった。しかし、先輩方は冷静だった。変化する状況に臨機応変に対応し、何も出来ない私に的確に指示をしてくれた。

震災を機にリーダーシップと現場力が如何に大切かを痛感した。先輩方がとっさに目の前で起きている現実に対して、冷静に全体像を把握し、それをもとに具体的な対応を図っていた。これらは、判断を任せられるリーダーがいて、被害や影響を最小化すべく現場力が日頃から意識づいていたからだと思う。

震災後、生きる気力を失った高齢者の方が亡くなるというニュースを目にした。余震が続く今、私達の施設で同じ事が起きないとは言い切れない。日頃からの意識付けの重要性を今回の大震災は私に教えてくれたと思う。

介護士　七海　裕太郎

私は勤務中でした。利用者の方に大きな怪我もなく本当に良かったです。自分自身、冷静になれていない部分が多々ありましたが、他スタッフと連携を取り、何とか無事に乗り越えられたと思ってます。特に電気、水、物資不足により最初は利用者の方々の健康が損なわれるのではないかと不安を抱きましたが、地域の皆さんに助けて頂い

て、とても感謝しています。

最後に今回の震災で色々と考えさせられることが多くありました。震災に対しての対応や考え方が浅く、又、色々な災害が生じるはずはないのだという甘い考えを是正しなければならないことです。今回のことで学んだことを、これからの生活や仕事で生かせられるように頑張っていきたいと思います。

介護士　若松　未明

望洋荘で遅番の勤務中でした。入浴介助で利用者をユニットへ誘導中に激しい揺れを体感しました。揺れは長く続き立っていられない状態で、その場に座り落ち着くのを待ちました。ユニットに戻ると、ホール内に物が散乱しとても酷い状況でした。ユニット内の片付けを行いながら、利用者への対応でした。

夜になってもライフラインは途絶えたままであり、又、余震が続いていたこと、家族との連絡がつかないことなどが重なり、精神面、肉体面の両面で大変疲れました。朝を迎えて、不安は少し薄れましたが、普段使えて当たり前だと思っていたライフラインが使えない不安や不便さを今回の大震災で学ばせられました。

介護士　松本　彩花

その日、私は夜勤前だった為、妹と近くの店に買い物に行っていました。駐車場に車を停めた時、携帯の地震速報が鳴りすぐに大きな地震が来ました。家には祖父が一人だったため心配になり、揺れが収まってから急ぎ戻りました。家の中は各部屋がぐじゃぐじゃでした。食器が割れたり散乱したり、鏡台が倒れたりしていました。テレビを点けると津波警報が出ていたので、外に出て近所の人とあれこれ話をしておりました。この間も余震は続いておりました。津波の大きさが想定できずに避難せずにいたら、家の両側の川が氾濫し、真っ黒な水が家の周りを取り囲み、逃げ場を失ってしまいました。家の一番高い二階に逃げ、ベレンダから下をのぞき込んでいました。どんどん水かさが増し、一階の床上まで来ていました。

一度水が引いた時、妹と私だけ近くの高台に避難しましてが、父と祖父が家に残っていたため、津波が落ち着いてから、自宅に戻りました。相談の結果、全員で再度高台に避難しましたが、夜中に祖父が不穏な精神状態になり、周りに迷惑を掛けてはとの思いから自宅に戻りました。余震と津波の恐怖で殆ど睡眠が取れないまま一夜を過ごしました。

震災時は携帯が通じず、誰とも連絡が取れずどこがとうなっているのか全く分からない状態でした。津波が来た時には、このまま水かさがが増し続け、命が危ういのではとも考えました。冷静さを失い、パニックの状態でどうしたら良いか分からなくなってしまいました。今回の大地震・大津波を経験し、自然の恐ろしさや命の大切さ、又、今まで使えて当たり前だった水や電気、ガスなどのありがたさを改めて考えさせられました。

介護士　武藤　恵

あの日、私は休みの日で車を運転中でした。タイヤがパンクをしたかと思うほどハンドルが取られた。前を走っている車が次々と左の路肩に駐車。自分も車を寄せた途端に激しい揺れが襲った。ハンドルにつかまっていても投げ出されそうだった。「どうしよう、怖い、怖い」と叫んでいた。子供達の安否を確かめるために、電話を掛けたが繋がらず。自宅を目指して車を走らせたが、途中、パニックを起こした犬を助けている人や呆然と壊れた屋根を見つめている人の姿があった。家にたどりつくまで、これからどうなるのだろう、今何が起こっているのだろうという不安な気持ちで一杯だった。

豊間地区は津波による大きな被害がありました。道路真ん中まで家が流されていたり、押しつぶされて大破した自動車が転がっていたり、とても酷い状態でした。大自然の脅威を目の当たりにしました。

介護支援専門員　吉田　佳子

三月九日午前十一時四十分頃、大きな揺れがビック。パレットふくしまを襲いました。その時私は研修の為、郡山を訪れていました。突然、天井の照明がグラグラ大きな音を立て激しく動き、講師の方から、「机の下に隠れてください」との指示がありました。学生の時に、避難訓練でこのような経験をしたことがありましたが、実際に揺れを感じて机の下に身を隠したのは初めてでした。揺れも長かったので、机の下に隠れながら、家は大丈夫かな？など色々のことが頭を過ぎりました。揺れが収まり講義が再開され、しばらくして震源が宮城県沖であり、津波注意報が発令されたことを知りました。自宅が海から五十㍍も離れていない所にあるので、揺れの大きさから、津波が家を襲わないか不安になりました。幸いにも津波の襲来は無く、その後は安心して講義を受けることが出来ました。この時の不安を、研修後に実家の両親と夫に話をしていました。

そして、その不安を抱いた二日後、さらに大きな揺れが生じました。「二日前の地震はこの地震の前兆だったんだ」と直感的に思いました。それと同時に「津波は！」と私は友人宅で地震に遭遇したため、家が心配で車で向かいました。しかし、その時には「津波が来ているから、ここから先は行っちゃ駄目だ」と消防の人達に望洋荘の交差点で停められてしまった。泣く泣く不安を抱えたまま高台にある友人宅に引き返した。家のペットの保護だけでもと思ったのですが、結局大津波警報が解除されることがなく、あっという間に日没をむかえ、そのまま不安な夜を過ごしました。眠れぬまま、夜明けを待って、急ぎ家に戻ってみると、家の周辺には車がひっくり返り、大木が散乱し、津波が家まで押し寄せた情景を目の当たりにしました。しかし、間一髪で家は津波の被害からは免れ、家の中にいたペットたちにも再会することが出来ました。元気な姿を見て、嬉しさと安堵感で胸が一杯になりました。

しかしながら、自分の幸運とは裏腹に、目を覆いたくなるような光景と現実がありました。我が家から数十㍍も離れていない家が津波で押し流され、更に毎朝犬の散歩で会っていた飼い主さんが犬共々何人も亡くなっていました。人間や動物の命というものが、こんなにも簡単に奪われてしまうものかと、改めて自然の脅威というのか凄さを知りました。同時に命の大切さ尊さをも実感しました。命さえあれば、たとえ全てを失ってもまたやり直すことが出来る。命だけは大切にしなければと強く思いました。あの時、津波の危険を知らせ引き留めてくれた消防の人達へは感謝の気持ちで一杯です。有り難うございました。

介護士　佐藤　正臣

あの大震災の時、私は須田医院の二階で電気治療を受けている最中でした。ベッドが激しく揺れ、その後、子供の泣き声が聞こえました。それが自分の娘でした。背中の痛みも忘れ、娘を抱えて外に飛び出したのを覚えています。家族が一緒の場所におり、すぐに無事であることが確認できたのは不幸中の幸いでした。多大な被害がテレビで伝えられる中、施設の状況を知ったのは、次の日、祖父母を送ってきた坂本さんと菅野さんの話からでした。

その後は、余震、原発、物資・ガソリン不足の問題が生じ、その結果、私は娘を東京に避難させることとしました。その間、残って懸命に働いているスタッフへの罪悪感からなかなか連絡が出来ませんでした。

最後にこんな自分を笑顔で迎えてくれた皆さんに心から感謝いたします。

介護士　山名　隆広

その時私は、望洋荘の勿来ユニットにて利用者の方々と一緒に居ました。その日は、一人のスタッフが午後から入浴介助の為、スタッフ一人で見守りを行っていました。地震の前に、利用者の方が持っていた携帯の緊急地震速報が鳴り地震が来ることを知り、あらかじめ利用者の方に地震が来ることを知らせました。ただ、「いつものように少し揺れて終わりだろう」と考えていました。

揺れが始まると、普段よりも長い揺れが続き、次第にいろんな物が落ちる音が聞こえました。ユニットのホールでも、絵やエアコンのフィルターなどありとあらゆる物が落下し、利用者の悲鳴や施

設の警報音が鳴り響いていました。私は地震の際、立ち上がろうとする利用者の方を抑える事で精一杯で、ただ揺れが収まるのを待つことしか出来ませんでした。揺れが収まっても、何が起きたのか理解不能でした。情報が入らない中、余震の不安と恐怖を感じながら、利用者の皆さんと一夜を過ごしました。

介護士　薗部　進一

その時私は早番で、ユニットの見守りをしながら 入浴後の整髪や爪切りを行っていました。地震の時には椅子から立ち上がろうとする利用者様を支えることで精一杯で、他の事はなにも出来ずに揺れが収まるのを待っていたのでした。その後も続く余震の揺れも大きかった為、居室にいた利用者様をホールに誘導し、声かけを行いました。永崎ユニットは入浴日だったため、二階で入浴中の利用者様はショートユニットでの見守りをお願いしました。

少し時間が経つと、地域の方々が避難をされて来て、人数があっという間に膨れ上がり、とても大変なことが起こったのだなと思いました。その日は家に帰れず、ユニットスタッフ三人で真っ暗な中、ロウソクと懐中電灯の明かりを頼りに励まし合いながら、朝を迎えました。

介護士　比佐　昌子

もしかしたら私は、今頃こうしてこの文章を書いていなかったかも・・・。二月末に急に「福島でユニットケアのセミナーあるから勉強してきたら」と言われ、当日は他スタッフ計五名とサンパレス福島で研修を受けておりました。午後の講義が始まり、暫くすると突然「ゴ～」という音と共に強い揺れを感じました。四階に居た為かかなり揺れ、シャンデリアが落ちたり、悲鳴やらで騒然としていました。それから十五分位して、やっとホテルのスタッフの誘導により建物外に脱出することが出来、あまりの凄さに震えが止まりませんでした。

それから気づいて「家に電話を・・」と思い掛けるも繋がらず。しばらくすると、一緒に研修に参加した人が携帯でテレビを観ながら「津波だってよ」との一言。益々焦りながら家と両親に電話を掛け続けました。というのは、私の家は海の目の前にあるからです。時間的に甥達の下校時間でもありました。二時間ほどしてやっと姉からメールが届き「家はダメみたい。まだ家族と連絡がとりない」とのこと。絶望的でした。私達の方も道路に亀裂が入っていたしていてなかなかいわきに戻れませんでした。

地震から五時間位たった時、親類の携帯から電話が掛かってきました。声を聴くと父の声で、家族全員の無事が分かり思わず泣いてしまいました。「こっちは危険だから帰って来ては駄目」と言われても行く場所はなく、七時間ぐらい掛けていわきに戻り、避難所でやっと家族に会えました。避難所は暗闇で、泣き声やら何やらで騒然とした状態でした。私は家族の無事(両親は怪我はしていたが)に安心すると共に、今後の不安で一杯でした。少しすると親戚から「息子のアパートに行くべ」と声を掛けられました。アパートに着いたのは深夜の零時を回っていました。アパートには四家族、十三人が入っていました。それからが本当の戦いの始まりでした。

今考えると、本来の勤務なら当日私は夜勤明けで、その時間は寝たばかりで、津波に呑み込まれていたと思います。冷静になってから、その日の出来事を両親が聞くと、それは想像を絶するものでした。私が住んでいた薄磯地区は、壊滅状態で亡くなった方は現在既に百名を越え、不明者もまだまだ沢山いる状況です。

永島敏行さんが慰問に来荘されました。永島さんはオフィシャルホームページの中で、津波による被害や風評被害からの復興に取り組むいわき市民へのねぎらいの言葉をかけてくださいました。

介護士　鈴木　祥子

おやつの時間になるところで、利用者様へおやつの声掛けをしてホールに入る時だった。何の前触れもなく揺れが始まり、「地震だね」とスタッフと会話したが、揺れが収まる気配はなく、すぐに居室に居る利用者様の元へ走った。ある利用者様は退所日という事で着替えをされているところだった。声掛けにて ベッドに端座位になってもらい、抱きかかえた。建物が軋む音が聞こえ、天井のエアコンが落ちてくるかもしれないと思いながら、揺れが収まるのを待った。一瞬、ニュージーランド地震が頭を過ぎった。このまま建物と一緒に潰れてしまうのではないかと思う程の壮絶な揺れだった。

その後、利用者様全員をホールに誘導した。停電になってしまったので、TVも消え外部の状況は分からない。まず、ユニットにいるスタッフで午後入浴している利用者様の事が気になり、急ぎ駆けつけ、バスタオルを掛けたままショートホールまで誘導した。何度か余震があり、その度に不安な表情を見せる。「大丈夫だよ」と、声を掛けながら、その場で過ごした。

望洋荘は避難所ということもあり、避難者が駐車場へと上がって来た。その後、すぐに悲鳴のような声が外より聞こえた。津波だ。私の頭の中では、地震と津波が結び着かなかった。

ある程度地震が落ち着くと、自宅のことが気になった。携帯で自宅に連絡するが繋がらず、夜になってやっと母と連絡が取れた。が、息子の安否が分からない。一時、許可をもらい携帯の灯りを頼りに、自宅に向かった。しかし、私の想像を遙かに超えた津波の破壊力により、道路には瓦礫、家屋の残骸、車等より寸断されていた。やむなく、明るくなるまで望洋荘で待つことにした。翌日、息子は下校中に先生の指示にて学校に避難した事が分かり安堵した。

その後、地震の影響で、望洋荘も自宅も、断水、停電等ライフラインが滞り、今までの普通の生活が送れなくなった。この災害で、電気、水道また備蓄の大切さを痛感した。更に、人々の善意の有り難さや家族の大切さを強く認識させられた。

看護士　浅井　修子

三月十一日は日勤勤務で、午後からは永崎ユニットの入浴日にあたっており、褥瘡の写真撮影をしていた。十四時四十六分に激しい揺れが起こりしばらく続いた。立っていられない程であった。入浴の為に待機していた数名の利用者を「動かないで」と一緒にいたスタッフと指示するのがやっとだった。揺れが収まり、もう一人の看護師と一階、二階に分かれ異常の有無を確認しながら、緊急避難をも考えて、ユニットホールに出来るだけ集めた。無我夢中だった。電気、水道も止まり、情報も無く、電話も繋がらない状態だった。

そうしている内に豊間の住民が避難してきた。津波と聞いた時は、思わず夫の安否が心配になった。日も暮れ、津波に巻き込まれて怪我をした数名の人の処置を行いながら、施設で夜を明かした。現実なのか夢なのか、夢であったなら早く覚めて欲しいものだと思ったが、紛れもなく現実であった。その後は原発事故、放射線問題で避難する職員が十数名いたが、それは致し方がない。と心に言い聞かせ、残っている職員で協力し合いながら今日を迎えている。

今回の災害に際し、ボランティアの方々、支援の手を差し伸べて下さった方々等、人の温かさを痛感した。まだまだ不安な日々を送っているが、罹災者等に比して私はまだ恵まれている方であると思っている。原発等々に憤りを感じてはいるが、生きていく以上、前を向いて進んでいかねばならないと決意を新たにしている。

介護士　猪狩　雅人

震災直後、私は家族と共に小学校へ避難した。避難時には、余震と津波による不安で、夜も眠れずにいた。友人、職場の方々にも連絡がとれず、どうしたらいいのか、胸が締め付けられる様な思いだった。

次の日、家族の様子を確認後、職場へ向かった。職場には、多くの避難している方がいて驚かされたが、利用者様、スタッフの無事が確認でき何よりだった。その後、利用者様の不安を少しでも取り除くことが出来るよう仕事に臨んだ。

数日後、妻が体調を崩し、郡山の病院に入院

することとなり、私も一緒に郡山に避難することにした。その時、私は利用者様、スタッフの方々に申し訳ない気持ちで一杯だった。私は、仕事が出来ない分、妻の看病をすることが今の私の努めだと思い、自分なりに精一杯の看病をした。

二週間後、職場へ復帰した。二週間という長い間避難し、迷惑をかけていたにもかかわらず、スタッフの方々は、「おかえり」と温かく受け入れてくれた。この時、私はこの職場でよかった、また働けることに感謝した。

今回の震災で、失うものも多かったが、得るものも沢山あった。人は、一人では決して生きていくことはできず、協力し、助け合う大切さ、人の絆の大切さ等学ぶことがたくさんあった。又、当たり前の生活が私にとってはすごく幸せなことだったと感じさせられた。得たものは、今後の生活に生かしていきたい。

介護士　馬目　英俊

その時私は、望洋荘に就職も決まり、翌日の引っ越しの為の荷造りをしていた所でした。大きな揺れを感じ、慌てて外に出ました。そこで見た近所のマンションや電柱が大きく左右に揺れていた光景は、未だに忘れません。すぐに停電となり、携帯電話も繋がらず。すぐに回復かと思っていた。しかし、車のラジオから流れてきた大津波警報を聴いた時はただならぬことだと思った。実家が海から六百M程しか離れていないので大変に心配になりました。連絡するが繋がらずで、二日後に連絡が取れたときにはほっとしました。

その後、新聞やニュースの報道を観て、改めて大災害だと認識しましたが、なぜあんなにも支援物資や義捐金の流れがスムーズでないのかと義憤も覚えました。

今後、この大災害で得た経験を仕事や普段の生活に生かせるように、色々なことに意識を持って取り組んでいきたいと思います。

介護士　伊藤　正寿

東日本大震災が起きた日は、仕事が休みで家で過ごしておりました。いきなりの地響きと大きな揺れで心臓がバクバクし、すぐに家から外に飛び出し、揺れが収まるのを待ちました。その後も余震が続き、近隣の家の瓦やブロック塀が崩れ落ちていました。両隣の方々も外に出て来ましたので、お互い何かあったら協力しましょうと声を掛け合いました。とにかく、辺りがどうなっているか把握しておくべきだと思い、徒歩で周辺を見回りました。状況の余りの悲惨さに家族が心配になり連絡を試みましたが、なかなか。やっと連絡が取れ、無事が確認出来たときはほっとしました。家に戻ると物が散乱し、壁には多数の亀裂が入っている状況でした。その後も余震が続き、亀裂は大きく広がる一方で、家屋の倒壊が心配になりました。又、原発で爆発でも起きたらどうしようと不安だらけでした。

大津波の情報を耳にし、望洋荘の入居者様やスタッフは大丈夫かと心配になり車を走らせて向かうも、新舞子ハイツで通行止めになっており、やむなく戻りました。兎に角、気が動転し別のルートでという思いは浮かびませんでした。その後、家に戻ると断水。スーパに水と食料を買いに行くとスーパも大変な状況で、外での販売を行っていました。長い行列に並んでの買い物でした。

このような経験があって、現在、水、電気、ガスの有り難さを痛感しています。又、ボランティアで来て手伝ってくださった方々への感謝の気持ちで一杯です。まだまだ安心できない状況ではありますが、慌てず入居者様の暮らしを支えていきたいと思います。

震災時、ライフラインが停止したため、急遽かまどを作成しました。入居者の方々は、かまどで沸かしたお湯で作った味噌汁を美味しそうにお召し上がりになっておられました。

事務職　佐藤　早苗

春先にしてはちょっと暑いと感じるぐらいの日差しが多少眩しい午後でした。昼の休憩を終えて事務所に戻りパソコンを開くと同時に、私の携帯の緊急地震速報のベルが鳴り響きました。次の瞬間、今まで体験したことがない強い揺れと共に辺りは停電。職員はパニック。急いでユニットに走り、入居者様の安全確認を見届けた後に、携帯でのテレビ画面で三メートルの津波情報を確認しました。

施設周辺の住民の皆様方が次々に、上がって参りました。海を見ると、既に海水が沖へと引いていました。数十分後、ゴオーと音を立てながら家を呑み込んで流れていく津波を見て、頭が真っ白になると共に愕然とした思いでした。その後、家族の安否も確認できず不安を感じながら、入居者、避難者の方々の対応に追われておりました。

父親はやはり八時間近く行方が分からず、警察、消防に捜索願を出したようです。結果として、私の自宅に居たことが確認でき、その時の安堵感は今でも忘れません。一番下の子供は、母親と津波が来る直前に、車から逃げだし、子供の膝まで水が上がって来る中、無我夢中で高台に逃げたとのことでした。

今回の震災で、私は、命って何ですか？人間って何ですか？というような様々な事を考えさせられました。それと共に、人間の持つ両面をかいま見ることが出来たと思っています。周囲が困難に遭っている中、我が身のことに汲々とする人。反対に、原発等の問題があるにも関わらず、いわきの地に遠方から我が身を惜しまずボランティアに来てくださった方々。いずれにせよ、今後の私の生き方にとても影響を与えられました。

がんばっぺいわき！！　がんばっぺ望洋荘！！

介護士　小泉　真人

震災から若干日が経ちましたが、少し大きな余震が来ると直ぐさま怯えてしまう自分がいます。あの時私は、望洋荘の職員五名で福島市へ勉強会に出かけており、研修の最中でした。地震だと思っているうちにどんどん揺れが酷くなり、とっさに全員が長テーブルの下に身を隠しました。「これはいつもの地震ではない」と思うと同時に、人生で初めて死を覚悟した瞬間でもありました。揺れも収まり、直ぐさまビルの四階から階段を使い外に避難しました。その後の余震が続きその度に脚が竦むのが分かりました。

職員五名全員、車でいわきへ向かいましたが、いわきの状況を思うと不安で一杯でした。道路は停電のために信号機は役にたたず、またあちこちで通行止めの状態で、大渋滞を引き起こしていました。誰もがパニック状況した。途中コンビニでトイレを借りるも長い行列。ふと陳列棚を見ると食料は殆ど無く、食料不足になることが予感できました。帰りの車の中、ラジオから流れる大津波、原発の情報を聞くたびに、不安が増すばかりでした。家族の安否も分からず、車内の雰囲気は重苦しいものでした。その後、各自、車中で家族の無事が確認出来、七時間後にいわきに辿り着きました。

この経験をきっと私達は年老いてからも子や孫に語るのだろうと思う。現在のお年寄りの方々が戦争経験をお話するように。本当に、私達は、自然に生かされているのだということを充分に認識させられた出来事でした。

五月の行事予定

五月に予定していた行事は「東日本大震災」の影響により全て中止させていただきます。

※なお、その時の状況により、出来る範囲でのレクリエーションを行って行きたいと思っております。

【五月のお誕生会予定】

五月一日（日）　薄磯　山際イクヨ様　（一〇六歳）誕生会
五月五日（木）　豊間　赤間　直子様　（八一歳）誕生会
五月七日（土）　永崎　岩佐　勉様　（七九歳）誕生会
五月九日（月）　勿来　吉田　貞雄様　（八〇歳）誕生会
五月十日（火）　四倉　磯邉　スセ様　（八六歳）誕生会
五月二六日（木）　豊間　猪狩クニ子様　（九七歳）誕生会

編集後記
『望　洋　荘』便り
平成二十三年四月三十日発行
発行所　いわき市
平豊間字合磯三十九番地
社会福祉法人　りんさく福祉会
介護老人福祉施設　望洋荘
電　話　（０２４６）５５－７３７３
ＦＡＸ　（０２４６）５５－７２５５